第三共和政期フランスの保育学校
――レオン・フラピエ『ラ・マテルネル』の分析を中心に――

天　野　知恵子

はじめに

フランスにおいて初等義務教育制度が確立された1880年代は、就学年齢以前の幼い子どもを対象にした保育の制度もまた刷新された時代であった。そうした子どもたちを受け入れた機関が、保育学校 école maternelle である。2歳から7歳未満の幼児を日々あずかり、その面倒をみながら初歩的な「教育」を行うものとされた。就学の義務はなく任意であったが、保育学校は1880年代に初等教育システムの中に組み込まれ、就学義務のある小学校と同様、公教育行政の対象となった。

本稿では、20世紀への世紀転換期ころ、パリの公立保育学校を舞台に描かれたひとつの物語を取り上げる。そしてそこで子どもが、親が、保育者がどのように描かれているかの検討を通して、この時期フランスの保育学校とはいかなるものであったのかを考察する。物語の作者はレオン・フラピエ Léon Frapié（1863–1949年）で、彼の代表作がここに紹介する作品『ラ・マテルネル La maternelle（保育学校）』（1904年）である。

以下では最初に、この物語の背景を明らかにするため、当時の幼児教育システムについて説明する。「保育学校」とは何であったのかという定義が、まずは必要だからである。次いで上記の物語を紹介していく。この作品の中において、保育学校に通う子どもや親のようすが、また保育や教育のあり方が、どのように描かれているかという問題を取り上げる。そして、第三共和政期の保育学校とはいかなるものであったのか考えていきたい。

1．物語の背景

⑴　サル・ダジールの時代

日本語では「幼稚園」「保育園」といったことばで表現される、就学前

の幼い子どもを対象にした保護教育施設は、フランスにおいては18世紀後半のヴォージュ地方において最初の試みが見られたと言われる[1)]。19世紀に入ると、そうした施設は需要を急速に拡大して広がり、「サル・ダジール salle d'asile（託児所）」として発展した[2)]。七月王政期にはもう、その組織化が検討されている。その後第二共和政期・第二帝政期になると、サル・ダジールは法律によって規定され監視される制度として確立した。

第二帝政下、1854年10月31日付知事宛の回状を見ると、サル・ダジールが当時、どのように認識されていたかがはっきりわかる。いわく、皇后の庇護下に置かれるサル・ダジールは、幼い子どもを危険から守るのみならず、「貧しい親たちに労働の自由を与える」ものである。と同時に、教育 éducation の場として、「家庭では知りもしないしできもしない、あるいは望みもしない」ような宗教的、知的な「最初の教育」を、子どもに与える目的をもつ、というのである。翌55年 3 月には、この制度に関わる法令が整備された。そこでは、サル・ダジールは 2 歳から 7 歳までの男女の子どもを日々あずかり、「子どもたちの精神的・肉体的発達が必要とする世話」を行う場であるとともに、初等学校に向け教育の準備を行うところであると定められた。貧困家庭であれば、公立のサル・ダジールを無料で利用することもできた[3)]。

こうした文言から、サル・ダジールの背後には共働きの貧しい親の姿を思い浮かべることができよう。工業化の進展にともなう産業構造の変化は、女性の労働の場を広げ、託児施設の必要性を増大させていた。だが単にそれだけはない。19世紀のヨーロッパ各国では、人間の成長に関し、「乳離れしてから分別をもつまで」の「根元的な」時期に関心がもたれるようになっていた[4)]。早期から集団学習や社会化を行う効能が語られ、上層階級も含めて、幼児期のさまざまな可能性に着目する試みが行われていたのである[5)]。サル・ダジールもまた、日中親のいない子どもを単に保護するだけの施設ではなく、教育のための場として位置づけられていたことは、上記の法令からもうかがうことができる。

1863年には、全国に3,308のサル・ダジールが存在した。うち 7 割は公立、 3 割は私立である。またサル・ダジールには、384,000人の子どもが登録していた。これはフランスにおける 2 歳から 6 歳までの総人口の13.8％に相当する[6)]。さらにこの時期、初等学校に幼児学級が併設されて就学前の子どもの面倒をみたりしていたし、農繁期の初等学校では、農作

業にかりだされて欠席する年長の子どもたちの代わりに、幼い子どもたちを受け入れたりもした。そうした点も考慮すると、2–6歳の子どもの31％が、何らかの保育施設に通っていたことになるという。初等学校附属の幼児学級に比べて、サル・ダジールは人口の集中する都市部や、女性の工業労働の多い地域でとりわけ発達した[7)]。これらの地域では、初等学校とはまた別に、独立した幼児の保育施設が必要だったのである。

サル・ダジールのスタッフはすべて女性である。主任 directrice がひとりで、時には助手 adjointe の助けを借りて子どもの面倒をみた。そうした保育者を育てるための制度も整備が進められ、1852年に「サル・ダジール実践講座」という名称を与えられた養成機関が、第三共和政期まで維持されている。そこでは4ヶ月間で綴り方や計算、地理、音楽などの講習や保育実習を行い、所定の成績をおさめた者には教育適正証書 certificat d'aptitude を与えることになっていた。パリでは1847–82年の間に、19–40歳の女性1,792人がこの実践講座を受講している。そのほとんどが給費生であったから、志があり人物保証がなされれば、原則として誰でも応募は可能であったことになる。1875年までの生徒1,660人のうち、証書を取得したのは770人である。彼女たちの多くが公立のサル・ダジールの主任になった[8)]。とはいえ、カトリックの影響力が強かった第二帝政下において、そうした証書をもつ世俗女性が活躍する場はあまりなかった。というのも、慈愛修道会や英知修道会のような女子修道会が公立のサル・ダジールにも進出し、その運営を担うことが多かったからである[9)]。

1881–82年の調査にも、そのことが示されている。全国のサル・ダジールの数は5,052になり、644,384人の子どもを受け入れていた。また子どもの74.5％は、公立のサル・ダジールに通っていた。だが、公私あわせてサル・ダジール全体の71.5％にあたる3,609の施設、子どもの人数にして68％にあたる439,967人が、修道会の手に委ねられていた[10)]。この時期、幼い子どもの面倒を見る仕事はとりわけ、女子修道会の慈善事業として展開していたのである。

⑵　第三共和政期の改革

そうした状況を変化させたのが第三共和政である。1880年代に確立された共和主義的な初等教育制度は、就学以前の幼児教育をも含むものであった。そこでは、サル・ダジールがそれまで担ってきた幼児の保護かつ

教育という役割は踏襲しつつ、これを共和国の初等教育機関のひとつとして位置づけるために改革がなされた[11)]。まずは1881年、サル・ダジールを「保育学校」へ名称変更することが決められた。慈善的、福祉的な意味合いを払拭して、教育機関としての側面を強調するためである。また、初等学校同様保育学校も、公立であれば授業料を徴収しないことになった。そのうえ、ライシテの原理が明示された。「家族や祖国や神に対する義務の感情を子どもたちに呼び覚ます」ことを目標として掲げる公立の保育学校は、「あらゆる宗派教育」から独立していなければならないと定められたのである[12)]。

翌1882年と1886−87年にもさまざまな規定が出されて、第三共和政期の保育学校の形態を整えていった。たとえば、公立保育学校のモデルは次のようなものである。人口2,000人以上で少なくとも1,200人が密集する市町村には、公立保育学校が設置される。2歳以上7歳未満の男女の子どもを受け入れるが、あずかる数は150人までとし、年齢や知的レヴェルにより少なくとも2つのクラスに分ける。教員スタッフとして主任と助手がいるほかに、女性用務員 femme de service がおかれる。子どもをあずかる時間帯は、3月から10月の間は朝7時から夕方7時まで、11月から2月までは8時から6時までである。さらに、送り迎えに使用される玄関ホール、教室、室内運動場、台所、中庭、洗面所や子ども用トイレ等々、保育学校に必要な設備は、広さや大きさについての具体的な数字とともに、詳細に列挙されている[13)]。

保育学校の意義は、あらためて次のように定義された。「ことばの通常の意味における学校ではなく」「家庭から学校への通過点」であり、「あたたかで寛容な家庭の優しさ」が保たれつつも、「労働や学校での規則正しさ」を手ほどきする場である、と。教育内容には遊びや歌、手や体の動きを取り入れることが明記された。だがまた、「もっとも身近なものについての知識」や、「図画、読み、書き、計算」についての「最初の基本」も教えられなければならなかった。それゆえたとえば2−5歳の年少組のプログラムには、10までの数の理解や計算の初歩が組まれていたりする。とはいえ、保育学校における「成功」とは、伝えられる知識の量やレヴェルによって測られるのではない。子どもが自ら学び、自ら好ましい習慣を身につけていくよう「良い影響力」を及ぼすことが大切なのであり、そうした影響力の総体によって測られる。保育学校のスタッフには、「疲れさせたり、強

制したり、過度にやらせたりはせずに、子どものさまざまな能力を発展させる」仕事が課せられたのである[14)]。

また保育学校を初等教育体制の一環として位置づけるため、保育学校と初等学校における教員資格の同格化が行われ、1888年からは、どちらにも同一の初等教員免状 brevet élémentaire が求められることになった[15)]。ただし保育学校が女性だけの職場であり、男性がいない点は従来と変わらない。また初等教育に関わる教員の養成は、すべて師範学校に一本化されるようになり、保育学校独自の養成機関は1891年に廃止された。さらに1921年には、師範学校で 3 年間にわたる研修を終え、修了試験に合格して高等教員免状 brevet supérieur を取得した者が、保育学校や初等学校に優先的に採用される方針が示された。教員の能力を向上させると同時に、同質化をさらに進めるためであった[16)]。

他方、サル・ダジール時代には女性のみに委ねられていた学校視察は、初等教育全体の視学制度の中に組み込まれた[17)]。そのため保育学校には、男性の初等教育視学官 inspecteur primaire も定期的にやって来るようになった。物語『ラ・マテルネル』においては、この視学官の訪問が、保育学校の全員に緊張を強いる重大事であったことが描かれている。作品の紹介に先立つが、興味深いので引用しておこう。いわく、子どもたちは視学官の前に整列し、「軍隊のように」姿勢正しく挙手して挨拶する。「視学官、それは最高司令官 chef suprême である。」ピンと張りつめた空気が漂う。教員スタッフはみな神経をとがらせ、お行儀良くできない子がいるとうろたえ泣き顔になる。そんな子には、あとで厳罰が待っている[18)]……。

また、こうした視学官とは別に、第三共和政期の初等教育体制を支える一員として、郡教育委員 délégué cantonal がおかれた。この職は『ラ・マテルネル』にも登場するので、ふれておきたい。郡教育委員は、行政や教育の当該者ではなく、他人に仕える職にもない25歳以上のフランス人男性の中から、郡（パリでは区）単位に 3 年任期で選出される。学校を見回ることが仕事であるが、視学官とは異なり、教育の達成度や方法、内容等に立ち入りはしない。学校の雰囲気や生徒のようすを、家庭や社会といった「より全般的な観点」から観察し、何が必要かを検討することがその役割であった。学校に対しては社会の代表者、社会に対しては学校の擁護者として、視学官と学校との連絡、仲介にあたることが期待されており、公教育行政に関して県当局への助言も行なった[19)]。このような制度の設置は、

新しい初等教育の体制を円滑に作動させるため、第三共和政の指導者たちが細かな配慮をしていたことをうかがわせるものである。

⑶　第三共和政下の保育学校

保育学校に子どもをあずけたのはどのような人びとで、いかなる事情があったのだろうか。パリでは1888年に、保育学校に通う25,619人の子どもの親に関する調査が行われ、61.4％は労働者、19.3％は勤め人（公務員など）、8.9％は経営者（商店や工場の）であったとする結果を得ている[20)]。以下ではもっと詳細な例として、リヨンを取り上げ紹介してみたい。ここでは1891年に、2–6歳児の人口の59.5％にあたる13,755人が公私の保育学校に登録している。1882年に保育学校に通う子の全国平均が19.8％であったことを考えると、これは相当に高い数字である[21)]。織物産業の中心地であっただけに、リヨンにおける保育学校の需要は大きく、その拡充が強く求められたという。教員たちの給料も、パリに次ぐ高さであった[22)]。

19世紀末から20世紀初頭のリヨンで、子どもの親の職業がわかる二つの保育学校がある。ひとつは、リヨン２区のペラーシュ地区に、もうひとつは、周辺部の労働者街ラ・ヴィレット地区に設けられた保育学校である。ペラーシュでは、1886年12月に在籍していた150人の子どものうち、78人に関して父親の職業が判明している。うち17％は公共部門（鉄道や郵便局など）での勤め人、10％は小商人である。そうした小ブルジョワジーに、21％の熟練労働者と、９％の日雇労働者が加わる。その他はさまざまな職種だが、大商人や企業家など、富裕層は見出されない。他方、ラ・ヴィレットの保育学校については、1901–02年、1911–1912年における総計1,113人の子どもの父親についての調査結果がある。それによれば、職人、労働者、日雇労働者だけで８割を占める。小ブルジョワの割合は、ここでは１割程度にすぎない[23)]。

この二つの保育学校で、子どもたちの通学状況を比較すると、顕著な違いがある。学校に登録した子どもたちが、実際にどの程度出席したかという割合を1910–11年の調査において見てみる。ペラーシュでは、８割以上の子どもが来るのは、新学期開始直後の10月の間くらいである。寒さが増し、風邪など感染症の広がる冬季になると、出席者の割合は50％台にまで落ち込み、春になっても70％には達さない。これに対してラ・ヴィレットでは、一年を通して出席率はあまり変わらず、80％を下回ることが

ほとんどない[24]。小ブルジョワと労働者が相半ばする地域より、労働者が多く住む地域の方が、保育学校の出席率は高いのである。

だがこの結果から、ペラーシュよりラ・ヴィレットのほうが教育熱心であったと指摘するわけにはゆかないであろう。ラ・ヴィレットの親たちはどのような状況におかれていたのか、それを考えるために、女性の就労状況を見てみよう。1901年のラ・ヴィレットについて、既婚女性である母親108人に関する調査がある。これによれば、「職あり」と回答した者が13％、「主婦 ménagère」と答えた者が20％、「職なし sans profession」という回答が63％になる[25]。就労者が少ないので驚かされるが、「主婦である」との回答者も、いわゆる今日的な「専業主婦」ではないことに注意すべきであろう。不定期に雇われていたり、家で内職をしていたり、洗濯女をしていたり、実際にはさまざまな女性労働の形態があった。これらの数字はむしろ、母親たちが定職でなく非正規で不安定な職にしか就けていない状況を示しているとも考えられる。さらに、結婚していなかったり、夫と死別したり離婚した女性は、ここには含まれていない。実際にはそうした母親たちも少なくなかったのであり、その多くが各種の繊維産業に従事していたという。あるいは洗濯女や、花屋や、食料品屋であったりした。

高い出席率の背後にはそれゆえ、伝染病の流行する寒冷な季節になっても、子どもを家に留め置くゆとりのない親の姿を想定することができるかもしれない。それでも、幼児を誰にも託さず放置しておいたり、仕事先に付き従わせたり、近隣にあいまいにあずけたりするのではなく、保育学校へ通わせたことには意味があろう。そこに、貧しい親なりの子どもへの配慮を見て取ることもできる。それはまた言い換えれば、国家の教育制度が、下層の人びとの間にも浸透していったということでもある。第三共和政期における保育学校は、とりわけ民衆のためのものであった[26]。

2．物語の紹介

⑴ 『ラ・マテルネル』～作品の解説と概要

『ラ・マテルネル』の内容紹介を始めよう。作者レオン・フラピエは1863年に金属細工師の子としてパリに生まれた。やがてセーヌ県の公務員になり、勤務のかたわら文筆活動を行った。今日フラピエは、我が国ではもとよりフランスにおいてもあまり知られている作家ではない。それで

もフランス文学事典をひもとくと、エミール・ゾラ（1840–1902年）やシャルル＝ルイ・フィリップ（1874–1909年）と関わりをもち、写実主義の系統に連なる作家のひとりとして紹介されている[27)]。フラピエの処女作『田舎の女性教師』（1897年）は、初等教育の教師をしていた女性と結婚した彼が、妻から聞いた話をもとにして書いたと言われる。教権主義の強い地域で、女性教師が苦労する物語であるという。そして1904年、やはり妻の教育体験をふまえて、『ラ・マテルネル』が執筆された。この作品が、フラピエの名前を一躍有名にした。というのも『ラ・マテルネル』は、その年のゴンクール賞（第2回）を獲得したからである。作品は後に映画化され、さらに有名になった[28)]。フラピエはその後も文筆活動を続けたが、今日にいたるまで出版され続けているのは『ラ・マテルネル』だけである。

フラピエの作品は、戦前にいくつか邦訳がなされている。『ラ・マテルネル』は、コレットの日本への紹介者としても知られる詩人、深尾須磨子（1888–1974年）によって翻訳された。『母の手』というタイトルで、1934年に出版されている[29)]。また1938年には、フランス文学者にして児童文学作家の桜田佐（1901–1960年）によって、9つの小品をおさめた短編集『女生徒』が出版された。このとき桜田は「訳者の序」において、フラピエに関し次のような解説を載せている。「彼は日々のパンに追はれてゐるやうな貧民や労働者の生活を観察し、その家庭や勤め先に在る人達、親子、兄弟、同僚、殊に幼い者同志（ママ）の間に通ふ幽かな心の陰翳を捉へて、簡素な筆に託して行く。そして、その中に籠もるやはらかな同情と、あかぬけした諷刺とは、微光のやうに読む者の胸へ流れ入るのを感ずるであらう[30)]。」フラピエの作品の特徴をよくとらえたこの指摘は、『ラ・マテルネル』についてもあてはまると言うことができる。

では、『ラ・マテルネル』とはどんな物語なのであろうか？　主人公はローズという若い女性であり、彼女の一人称の語りによって話が進んでいく。ローズはパリのブルジョワの生まれで、古典文学を勉強してバカロレアに合格し（bachelière）、大学教育を受け文学士 licenciée の称号を得たインテリ女性である。こうした女性が、当時どれほど稀有な存在であったかは、世紀転換期のころ、フランス人女子大学生の数はせいぜい数百人程度であったという事実からもうかがうことができよう[31)]。年頃になったローズは、相応の相手と婚約する。だが父親が破産して世を去り、彼女の運命は暗転してしまう。婚約は破棄され、落ちぶれたローズは自立をよぎなく

される。たったひとりの肉親となったおじは、ローズが役にも立たぬ肩書きをもっていると言って強く非難する。その心ないことばに深く傷つきながら、彼女が何とか見つけることができたのは、パリの下町20区、プラトリエ街にある保育学校の女性用務員の職であった。学位免状を「永遠にトランクの底に終って」ローズは仕事につく。苦境を生きる精神的な支えとするために、何か書くことが必要であった。それゆえローズは、日々のさまざまな出来事や観察の記録を日記に書きとどめおこうと決心する[32)]。

この保育学校の職員はあわせて5人、うち教員メンバーは3人である。主任は、太り気味なのを何とか隠そうとしている「40歳のまだかなり美しい寡婦」で、2–3歳の年少組を担当する。3–5歳の年中組は、「教師より市場の裕福な女商人みたいな」大柄で粗野なギャラン夫人が受け持つ。もうひとりの助手で、5–7歳の年長組をあずかるのは、まだ若くほっそりしたボール嬢である。造作や所作が「女神ダイアナのイメージを思わせるような」身なりの整った女性だ。ギャラン夫人は初等教員免状しかもたないが、ボール嬢は高等教員免状をもつ「師範出」で同僚の格を下に見ており、ギャラン夫人もまた「師範出」には皮肉なまなざしを向けている。この3人の教員に加えて、用務員が2人。ローズの他にもうひとり、おもに台所を担当するポーラン夫人がいる。南仏系の活動的な、「年齢不詳」の親切な女性である[33)]。

この5人で、毎日200人ほどの幼児の面倒をみる。規定の定員をこえているが、実際それはまれなことではなかったようで、先に見たリヨンにおいてもそうした事例がある[34)]。ローズは毎朝6時に到着し、青いエプロンを身につけると、雑巾や箒を手に日に13–14時間も働く。保育学校の暖房や通風を担当するのも、土や泥、時には吐瀉物や排泄物で汚れる床を清掃するのも、洗面所やトイレへ子どもたちを連れて行くのも、親の送り迎えの際に立ち会い、子どもたちがもってくるバスケットの受け渡しをするのもみなローズである。授業はもたないが、主任を手伝って年少組の世話をしたり、適宜誰かの代わりもつとめる。回らぬ舌で「ローズ、ローズ」と言ってまとわりつく子どもたちの相手をしながら、長い一日が終わる。それで月80フランの給料を得るのである[35)]。

『ラ・マテルネル』におけるいまひとりの重要人物として、区の教育委員リボワをあげておこう。医師の資格をもつ文学好きの心優しい青年で、職務に忠実であるため頻繁にローズの務める保育学校のようすを見にやっ

て来る。リボワはやがて、ローズが下働きの身でありながら、ひじょうに教養豊かであること、また子どもに優しく子どもたちからも慕われていることを知り、彼女に惹かれていく。一方、婚約者に棄てられた心の傷をかかえるローズは、自嘲的に虚勢を張ったりもするのだが、リボワの純朴さにふれる中でしだいに彼を意識するようになる。2人の恥じらいやぎこちないやりとりは、『ラ・マテルネル』に一種の純愛小説の趣を添えている。

⑵ 『ラ・マテルネル』に描かれた民衆世界と子どもたち

よどんだ下水と得体の知れない屑に埋まった歩道の、居酒屋ばかりが目立つ界隈。メニルモンタン大通りから始まるひとつの道路を進むと、公共の建物であることを示す色あせた一本の旗が立っている。そこがローズの保育学校である。彼女は通ってくる子どもたちのようすを見て、まず驚く。「すり切れた貧しい種族」を形成しているかのように、貧困がにじみ出ていたからである[36)]。やせた猫さながらに骨が飛び出し、重みをまるで感じさせない体。とがった顔は肉と言うより蝋のようで、血管が透けて見える。すえた臭いに、垢、薄汚れた下着。貧相なこの子どもたちは、じっと立っていられないどころか、座っていても体が揺らぐほどひ弱である。この子らのためにベストをつくそう、ローズはそう決心する[37)]。

親について、ローズはその職業を3つの範疇に分けながら、以下のように観察している。まずは商店主がいる。次いで、行商人や職人、あるいは決まった職と所帯をもった労働者がいる。三番目に、分類しがたい仕事に就き、不安定な暮らしをする人びとがいる。一番数が多いのがこの人びとである。家族かどうかもわからない多人数が、週単位、時には日単位で家賃を支払う家具付き貸部屋に住んでいる。それがこの界隈の特徴なのである[38)]。

教員たちはできるだけ親との接触を避けようとしているが、ローズはむしろ母親たちと仲良くなるようつとめたおかげで、彼女たちの生活もかいま見ることができた。「今の子どもたちは幸せ」だというプリュック夫人は、6歳の時にはもう働いていたという。毛梳きの仕事で胸を痛め、肺がひとつしかない。自分の子どもも医者から「ちょっと結核」だと言われているが、それなら将来兵隊にならなくてすむ……この子はしかし、学期末には病気が進行して、初等学校に登録するまでもないと医者から宣告されてしまうのであるが[39)]……。ローズはまた母親たちから「あなた子どもはいな

いの？」「子どもをもったことはないの？」と聞かれることがある。未婚だというのが答にならないことはよく知っているから、ただ「いいえ」とだけ返す。すると「ええ、よくわかるわ、薬をつかうのね。でもそれでは体を痛めるわ」と忠告されたりする。ローズがやせているので、いっそうそれらしく見えるというわけである[40)]。

この地域では、家庭はさまざまな問題を抱えている。まずは子だくさんである。ローズは日々、子どもの数が多すぎてひとりひとりを充分見てやれないと嘆く。弟妹の世話で疲れ切っている少女が、ふとこうもらしたりする。「ママは子どもをもつことをなんとも思ってやしない。災いはみんなあたしがしょい込むんだもの[41)]。」また、親のアルコール依存症も深刻である。親が酒に侵されると、生まれてくる子に影響が出る。ローズはそんな症例をいくつも目にする[42)]。さらに重大なのは、家庭における暴力の問題である。『ラ・マテルネル』には、子どもの周りで、あるいは子どもに対してふるわれる暴力を示すエピソードが、いくつも記されている。たとえば、ルイ・クレロンという少年が母親をたたいた。優しいお母さんなのになぜ？と聞くと、「パパがするみたいに」したと言う[43)]。また、クリネルという少年ののどに傷跡がついていた。「誰がしたの？」「うちに泊まりに来るおじさん」「お母さんは何て言った？」「もっとやっとくれ、こいつなんざいっそ殺しちまったらいいのさ[44)]。」

暴力は時に、取り返しのつかない事態を引き起こす。ローズにとって忘れられない少年がいる。おどおどして、よく彼女のスカートをつかみにきたフォンダンである。父母になぐられ、いつも顔を腫らしていた。ある時ローズは、フォンダンに仕事をじゃまされて苛立ち、思わず平手でたたいてしまう。後悔したが遅かった。少年は「あんたも？」というまなざしで彼女を見つめる……フォンダンはその後も、ためらいがちにローズに甘えにきていたのだが、ある朝ひとりの少女がこう告げた。「ローズ、フォンダンが死んだの[45)]。」さらには、こんな悲劇もある。ある寒い朝のこと、５歳の少女マリ・ファデットが身なりも整えず、ひどく青ざめてやってきた。子どもの顔の悪さにもいろいろあるが、これはいつにないようすでただごとではない、とローズは感じる。何を聞かれてもうつろな少女のバスケットには、赤茶色のシミがついていた……夜のうちに、母親が殺されたのだった。朝、マリはひとりで服を着て死体をまたぎ、バスケットをつかむと無我夢中で登校してきたのである[46)]。

総じてきびしくゆとりのない生活を送る中にあっても、子どもにはそれぞれ個性がある。ローズはとりわけ目立つ子どもたちを観察する。たとえば年長組のボス的少年アダム。視学官が来た日にわざと列を乱し、大目玉を食らったのはこの子だ。ローズにかみついたりもするのだが、時に助けてくれる。子どもたちが整列しないで騒いでいると「ならんでくれってるんだよ、はなたれども！」と一喝する勢いがあり、「けたはずれ」の子だとローズは思う[47]。またボンヴァロ。将来新聞に、「殺人者の顔か、殺された人の顔で」出そうな、不穏な雰囲気をただよわせた子だ。「お母さんが好き？」と聞くと、「ぼくをぶつ」と答える。彼の父は母を、母は彼をたたくのである。だがローズのことは好きだという。「私がお菓子をあげるから？」と聞くと、ローズの目の中には絵があるからと答える、そんな子である[48]。女の子では、小柄ゆえに「小ねずみ」とあだ名されるルイーズ・クルーテが指導的な存在だ。「この子の立派な人格が守られなければ、学校の価値はない」とローズに思わせるほど善良なしっかり者で、弟の面倒をよくみている。母親も働き者の八百屋である[49]。さらに、おしゃまな少女イルマ・ゲパンがいる。リボワにお金をもらったおかげで、きれいなリボンを買ってもらえたの、とローズに報告にくる。町中でリボワに出会ったとき、学校で誰が一番好き？と聞かれた。「誰かさんだって言ったら、あたしに20スーくれたの[50]。」すっかりお見通しというわけである。

⑶　教育とは何か～『ラ・マテルネル』の情景から

ローズの保育学校では、年中組から「時間割」があり、授業が行われる。読み書き計算、お話、地理や歴史、歌や図工、手仕事に道徳と、科目は多彩である。年長組においては、「師範出」のボール嬢が「本当の講義」をする。彼女が「海って何ですか？」と聞くと、子どもたちはいっせいに、「海は塩辛い水の大きな広がりです（ユヌ・メール・エ・チュンヌ・グランデタンデュ・ドー・サレ）」と答える。だがローズは、その中で元気よく次のように叫んでいる子たちもいることに気がつく。「私のおばあさんは塩水の中で寝そべっています（マ・グランメール・エレ・テタンデュ・ダン・ロー・サレ）[51]。」

授業はいつもこのように、ユーモラスに展開しているわけではない。ローズは矛盾に思いをはせる。たとえば教員たちは、日頃から次のように教えている。「あなたたちはご両親の言うことを聞かなくてはなりません。ご

両親のお手本にならわないといけないのです[52]。」確かに子どもは、親をよく見ている。だが、「父さん母さんごっこしない？」と誘われた少女が、「ああ、やだ、あたしぶたれたくない」と返事する[53]、それが現実なのである。また、ある父親はタバコをきらすと、母親が昼飯代にもたせた 2 スーを子どもから取り上げ、なくしたと言え、と命じる[54]。さらには、父親にたたかれこづき回されながら引きずってこられる少女もいる。彼女は喪章をつけてまだ一週間にしかならない。保育学校へ彼女を連れてきたのは、新しい父親だったのである[55]。親は完璧どころか、全くその反対だったりする。ローズはあれこれ考え、「可能な限り子どもが親と異なること」が大切であるとさえ思う[56]。ところが教員たちは鈍感である。ローズは、主任が「ご両親は、あなたたちに良いことしかしません」というのを聞いて、親になぐられ腫れ上がったフォンダンの目が、「緑に、黄色に、黒く」光るのを見る。そして、なぜ主任はそのことに気づかないのだろうといぶかるのである[57]。

教員たちは総じてまじめであり、保育学校の指導要領に従って行動している。何がおかしいのであろうか。ローズは当時の教育制度そのものに対して、厳しい批判の目を向ける。「外見！外見！体裁！教師も視学官も子どものために働いているのではない。彼らは序列的な点数や、規則や、行政のために働かされているのだ。」しかも行政はといえば、「統計」や「報告」のために動いているだけである[58]。ローズはまたときおり保育学校にやってくる「善意の人びと」が、「真ん丸ほっぺちゃん、抱っこさせて」と言いながら砂糖菓子や小銭をばらまいていくのにも苦々しい思いをいだく。子どもたちは日々のパンやスープにも事欠いているというのに[59]。いったい誰が本当に、子どものことを考えているのであろうか。

ローズはさらに、当時の教員養成システムのあり方に対しても疑問を投げかける。女子師範学校における寄宿生の 3 年間は、「不完全で人工的」な生活である。教師の卵たちは外部と切り離され、ろくに運動もしないので健康的ではなく、試験や免状のことしか考えない。教師や仲間へあこがれを抱くことはあっても、自身の優越感に深くひたっている。「温室育ち」の彼女たちは、「繕いも染み抜きも食卓の準備もできなければ、箒や雑巾やアイロンを手にすることもなく」、家政学は教科書で学ぶだけである。職業上の知識は「まったく理論的」で、本を通してしか子どもについて知らず、教師になっても「原則で」授業することしかできない。これで、さ

まざまな要素からなる社会の複雑な関係に、どうやって臨めというのであろうか[60]。

子どもたちと実際にふれあう中で、ローズは大切なことは何かを考える。「子どもは大人の権威を受け入れつつも、自分の人格に配慮してくれることを望む。子どもの問題に取り組み、まじめに受け止め、理解していると示さなければならない[61]。」また、子どもはひとりひとり違うのだから、道徳の規準も一律ではない。ところが、まるで「異なった60人の患者に対して、同じ水薬を処方する」かのように、教員たちは「気質にも、家庭にも、経済的条件にも配慮なく」「集団的療法」を振りまく[62]。たとえば「けたはずれ」のアダムには、「けたはずれの善」でもって接してやらなければならない。そうでなければ彼を「けたはずれの悪」に走らせてしまうかもしれない。それぞれの気質をよく見極め、ふさわしい教育が必要なのである[63]。さらにローズは、夏休み前の学期末、ボール嬢が年長組の教室で「あなたたちは私の教えをよく役立てました。生涯ずっとご褒美がもらえますよ」と語った時にも、強い反発を感じる。貧しい人びとにあっては、何の保護もない丸腰の善良さが、はたして成功をもたらしてくれるであろうか？　むしろ、彼らをよりいっそう搾取されやすくしてしまうだけではないのか[64]……子どもたちが生きる社会の現実と、保育学校で教えられることのギャップに思いをはせながら、ローズは教育の欺瞞性を厳しく告発する。

それでもこの小説は、保育学校における教育が、何の意味もなさないとは主張していない。たとえば年長組のクラスで、「猫とシジュウカラ」の話がなされた時のことである。あるおばあさんの飼い猫が、シジュウカラの雛を食べてしまった。親鳥は猫を責めて毎日のように攻撃をしかけていたが、やがて新たな雛を育て始める……臨場感たっぷりのボール嬢の語り口が、子どもたちの心をつかむ。雛がかみ殺される場面では、子どもたちはまるで自分が食べられるかのように身をすくめ、新たな命の誕生を知った時には、「猫がまた食べたらいやだ！」と叫ぶ……ローズはこの情景に感動して、民衆が高貴なライオンに喩えられるのもなるほどだとうなずくのである[65]。

だが彼女はまた、話をほとんど聞いていない子や、意地悪く笑ったりする子もいれば、猫に憤慨していた子が、数日たつともう記憶があやふやになったりするのも見逃してはいない[66]。全員がいっせいに感動するわけで

もなければ、感動が長く続く保証もないのである。さらに彼女は、子どもの間でいじめがあることも書きとどめている。ぼろを着た子がしばしば、標的になったりする。「この子たちも、もう自然ではない[67]。」

保育学校で展開するさまざまな出来事を題材にして、ローズはあれこれ考えをめぐらす。子どもとはいかなる存在か、教育は何のために行われるのか、どんな教師が求められているか、と。作者フラピエが、教師であった妻の体験をふまえて書いたからであろうか、『ラ・マテルネル』における子どもたちの行動や反応、また彼らを観察しながらローズが行う分析や考察はどれも、具体的で真実味があり、興味深い。それらは今日においてもなお、示唆的であると言うことができよう。

『ラ・マテルネル』は暗い結末を迎える。夏休み前の最後の出勤日。記念撮影も済み、仕事を終えた帰り道、リボワからの求婚を確信したローズは、保育学校をやめて子どもたちを見捨ててしまうことになりはしないかと悩みとまどう。そんなローズに、ひとりの母親が衝撃的なニュースをもたらす。働き者の八百屋、クルーテ夫人が、子どもたちを道連れにして運河に身投げしたというのである。夫人は引き上げられたが、妊娠しており、少し飲んでいた。子どもたちの方は溺れてしまった。あのしっかり者の「小ねずみ」ルイーズとその幼い弟のことである。なぜあの子が……

混乱するローズに、厳しい現実が追い打ちをかけた。知らせてくれた母親の子どもは、しばらく保育学校へ来ておらず、居酒屋で飲食したりしている。ローズがふとそのことにふれたとたん、母親は猛烈に怒り出したのである。学校へ行って、貧乏から抜け出すどんな役に立つのか、きれいごとばかりではないか、と。「激高した母親は、かつてないような非妥協的な仕草で、『あたしらの通りから出てってしまいな！』と、彼女の貧困から私を追い払ったのである[68]。」

むすびにかえて～1世紀後、もうひとつの物語

最後に、保育学校を舞台にしたもうひとつ別の物語を紹介しておきたい。『ラ・マテルネル』の出版からほぼ1世紀を経て制作された、ベルトラン・タヴェルニェ監督による映画『今日から始まる』（1999年）である[69]。

時の流れの中で、フランスの保育学校はどう変化するであろうか。第三

共和政期にはおもに都市民衆層の子どもが通った公立保育学校には、20世紀後半になると、階層を問わず就学年齢前の子どもが普通に通うようになる[70]。それでも、保護と教育の場という保育学校の位置づけは変わらない[71]。また、視学官が来ると保育学校に緊張が走るのも、ローズの時代と同じである[72]。そのうえ、教員を女性に限定する規定がなくなったのは、ようやく1977年以降のことである[73]。変わる部分も、変わらない部分もあれば、繰り返される出来事もある。

『今日から始まる』の主人公はダニエル。保育学校の主任だが、彼以外のスタッフはみな女性である。中でも大きな役割を果たすのがカティで、彼女は教員資格はもたないが、さまざまな雑用をこなし、子どもたちを深く愛している。『ラ・マテルネル』のローズのような存在である。

ダニエルはパートナーのヴァレリアと暮らす。彼女は非婚の母で、ダニエルには血のつながらない息子がいる。ローズの場合とは異なり、カップルの成立には持参金などもう介入しないどころか、結婚という制度さえ意味をなさなくなっている。だがダニエルの父は、ヴァレリアをよくは思っていない。彼女を「売女」と罵倒したこともある。

ダニエルの保育学校があるのは、北フランスの炭坑町エルナン。不況が重苦しく街を覆い、保育学校の子どもたちにも暗い影を落としている。親の半数近くは正社員ではない。ひと月に数日働ければいいという程度の職にしかついていない親も多い。ヴェテランの教員がこうもらす。20年前は1クラス45人もいたのに、何の問題もなかった。今は30人しかいないのに、遅刻が多く子どもたちは不潔で「にっちもさっちも行かない状態」である、と[74]。中でも、5歳の少女レティシアの家族は極貧である。家は電気を止められ暖房もなく、赤ん坊の弟は衰弱している。父親は家族を愛しているが、長期の出稼ぎが多く不在がちであり、母親はアルコール依存症に陥っている。ダニエルはこの家族のためにかけずり回るのだが、行政を動かすことは簡単ではない。

そんな中、追いつめられたこの母親はついに、子どもたちと一緒に睡眠薬を飲んでしまう。『ラ・マテルネル』において、八百屋のクルーテ夫人が子どもたちを伴って運河に飛び込んだように。1世紀を経てもなお悲劇が繰り返される。貧困の中で孤立してしまい、悲観した母が子どもたちと心中をはかる……今度は母親も助からなかった……。3人の葬儀が行われ、大きな痛手を受けたダニエルは、保育学校をもう辞めてしまおうと考える。

それでも、この物語はそこでは終わらない。映画の終盤には、ダニエルと保育学校の教師や子どもたちが、ヴァレリアやまわりの人びとの助けを借りながら、痛ましい事件の衝撃から何とか立ち直ろうと努力するようすが描かれている。

註

1）Catherine ROLLET, *Les enfants au XIXe siècle*, (Hachette, 2001), pp. 148−149.

2）サル・ダジールに関する基本的な文献としては、Jean-Noël LUC, *L'invention du jeune enfant au XIXe siècle*, (Belin, 1997)、および法令をあつめた資料集である id., *La petite enfance à l'école, XIXe–XXe siècles*, (Economica, 1982)。以下でこれらを用いる際には LUC, *L'invention* もしくは LUC, *La petite enfance* と記す。また日本語文献として、藤井穂高『フランス保育制度史研究――初等教育としての保育の論理構造――』（東信堂、1997年）。さらに赤星まゆみ「フランスの保育学校をめぐる最近の論争点――早期就学の効果――」『保育学研究』第50巻第 2 号（2012年）は、歴史的経緯をふまえながら保育学校の特徴を整理している。

3）以上1854−55年の政策に関しては LUC, *La petite enfance*, pp. 103, 106−107.

4）Jean-Noël LUC, "Les premières écoles enfantines et l'invention du jeune enfant" dans Egle BECCHI et Dominique JULIA (sous la dir. de), *Histoire de l'enfance en Occident*, t. 2, (Seuil, 1996), p. 305.

5）LUC, *L'invention*, p. 415.

6）*Ibid.*, p. 267.

7）*Ibid.*, pp. 271, 276.

8）*Ibid.*, pp. 315, 320.

9）*Ibid.*, p. 310. 初等学校と同様、修道会の恭順証書が保育学校の教育適正証書の代わりとなった。LUC, *La petite enfance*, p. 109.

10）LUC, *L'invention*, pp. 469−473.

11）*Ibid.*, p. 393.

12）以上1881年の改革に関しては LUC, *La petite enfance*, pp. 148−152.

13）以上の規定に関しては、言及順に *ibid.,* pp. 189, 154, 174, 200, 167−171, 202−207.

14）保育学校の意義・役割に関する以上の引用は、言及順に *ibid.*, pp. 175, 191, 232, 208.

15）*Ibid.*, p. 190.

16）*Ibid.*, pp. 173, 239.

17）第二帝政下では、公務員や教員などの夫や父をもつブルジョワ女性たちがサル・ダジール視察の役目を担っていたのである。その点で、それは女性に開かれたひとつの公職の道であった。LUC, *L'invention*, pp. 327–332.

18）Léon FRAPIÉ, *La maternelle*, (Éditions Albin Michel, 1908), p. 168. 以下本稿では、『ラ・マテルネル』のテクストとしてこれを用いる。

19）Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire de Ferdinand Buisson, 1911 (http://www.inrp.fr/édition-électronique) における Délégués cantonaux の項目参照。

20）Marianne THIVEND, "L'école maternelle entre la municipalité et les familles : Lyon, 1879–1914" , *Histoire de l'éducation*, no 82, 1999, p. 178.

21）*Ibid.*, p. 159.

22）保育学校の主任は、法によって最低でも800フランの年収を保証されていたが、19世紀末のリヨンでは2,100–2,700フラン、パリでは2,750–3,800フランを得ていたという。*Ibid.*, pp. 166.

23）*Ibid.*, pp. 175–177.

24）*Ibid.*, pp. 179–180.

25）以下ラ・ヴィレットにおける女性の就労に関しては *ibid.*, p. 178.

26）L.-H. PARIAS (sous la dir. de), *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France*, t. 3, (Nouvelle librairie de France, 1981), pp. 547–549. 近年、19世紀末から20世紀前半が子ども史における画期として注目されている。保育学校の組織化は、児童労働の制限や児童虐待の防止、乳幼児検診制度の確立などとともに、民衆層の家族を取り込む目的でこの時期実施された国家政策のひとつとして位置づけることができる。そうした点に関しては、岩下誠「福祉国家・戦争・グローバル化――一九九〇年代以降の子ども史研究を再考する」橋本伸也、沢山美果子編『保護と遺棄の子ども史』（昭和堂、2014年）所収を参照。

27）J.-P. de BEAUMARCHAIS, Daniel COUTY et Alain REY, *Dictionnaire des littératures de langue française*, a–f, (Bordas, 1984), p. 849.

28）ジャン・ブノワ＝レヴィ、マリ・エプスタン制作、マドレーヌ・ルノー主演のトーキー映画『ラ・マテルネル』（1933年）は、『ラ・マテルネル』とその続編であるフラピエの短編集『ラ・マテルネルの物語』（1910年）をもとにして作られた。この映画の台本も戦前に邦訳されている。小出峻（訳）『母の手』（平原社トーキー・シリーズ第21巻、1934年）。

29）深尾須磨子（訳）『母の手』（平凡社、1933年）。この翻訳では、原文のところどころが省略されている。なお、本稿における『ラ・マテルネル』からの引用は、深尾訳を参考にしながら筆者が訳出した。

30）桜田佐（訳）『女生徒』（岩波文庫、1938年）。

31）上垣豊「ラテン語の障壁を乗り越えて――第三共和政期フランスにおける女子高等教育」香川せつ子、河村貞枝編『女性と高等教育――機会拡張と社会的相克』（昭和堂、2008年）171−175頁参照。
32）FRAPIÉ, *La maternelle*, pp. 1−8.
33）*Ibid.*, pp. 12, 14, 18, 21, 198−199.『ラ・マテルネル』に描かれているように、パリの保育学校では、クラスは3つに別れていた。THIVEND, art. cit., p. 163.
34）1クラスは50人までというめやすがあったが、リヨンでは1クラスに60−80人ということもまれでなく、クラスの増設がいつも検討されていた。1904年にはたとえば、69人の年少組を2人の女性用務員でみていた保育学校もあった。THIVEND, art. cit., pp. 172−174.
35）FRAPIÉ, *La maternelle*, pp. 16−17.
36）*Ibid.*, pp. 9−10, 20.
37）*Ibid.*, pp. 36, 159.
38）*Ibid.*, pp. 54−55.
39）*Ibid.*, pp. 187−188, 291.
40）*Ibid.*, p. 190.
41）*Ibid.*, p. 267.
42）*Ibid.*, pp. 141, 255.
43）*Ibid.*, p. 108.
44）*Ibid.*, p. 101.
45）*Ibid.*, pp. 260−266.
46）*Ibid.*, pp. 228−230.
47）*Ibid.*, pp. 289−290.
48）*Ibid.*, pp. 79, 153−154.
49）*Ibid.*, pp. 66, 275.
50）*Ibid.*, pp. 103−104.
51）*Ibid.*, pp. 46−47.
52）*Ibid.*, p. 111.
53）*Ibid.*, p. 194.
54）*Ibid.*, p. 186. ローズの保育学校では、子どもは昼食を学校でとることも、自宅に帰ってとることもできた。学校で食べる場合には原則2フラン徴収されたが、払わなくても食べることはできた。
55）*Ibid.*, pp. 138−139.
56）*Ibid.*, p. 113.
57）*Ibid.*, pp. 261−262.
58）*Ibid.*, p. 222.
59）*Ibid.*, pp. 182−183.

60）*Ibid.*, pp. 200−201.
61）*Ibid.*, p. 177.
62）*Ibid.*, pp. 146−147.
63）*Ibid.*, pp. 289−290.
64）*Ibid.*, p. 286.
65）*Ibid.*, pp. 130−138.
66）*Ibid.*, pp. 145−147.
67）*Ibid.*, pp. 194−195, 227.
68）*Ibid.*, pp. 301−305.
69）Bertrand TAVERNIER avec Philippe TORRETON, *Ça commence aujourd'hui*（今日から始まる）, DVD Video/Pioneer（1999）. 台本の翻訳は、ベルトラン・タヴェルニエ（監督・脚本）、ティファニー・タヴェルニエ、ドミニク・サンピエロ（共同脚本）、実川元子（著）『今日から始まる』（愛育社、2001年）。
70）1960年代に保育学校はブルジョワの家庭にも普及し、1980年代には3歳以上のほとんどの子どもが通うようになった。Eric PLAISANCE, *L'enfant, la maternelle, la société*, (PUF, 1986), pp. 19−21.
71）赤星、前掲論文、129−130頁。
72）タヴェルニエ、実川（著）『今日から始まる』140頁。
73）LUC, *La petite enfance*, p. 188.
74）タヴェルニエ、実川（著）『今日から始まる』12、67−68頁。